
革新者と魔法少女達の出会い

おなか痛い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

革新者と魔法少女達の出会い

【Nコード】

N7227X

【作者名】

おなか痛い

【あらすじ】

ELSとの対話から早2年。ヴェーダからの指示で謎のエネルギー反応を確かめに行った刹那は、突如正体不明の光に飲み込まれてまったく異なる世界へ。そこで刹那は新たな戦いに巻き込まれていく……。

作者は素人中の素人で、この作品は処女作です。

さらにこの小説は作者の勝手な解釈を含んでる場合があります。それでもいいという人は見ていってください。

プロローグ（前書き）

どうも、おなか痛いです。

生まれて初めての小説投稿です。

グダグダになると思いますが、生温かい目で見てください。

プロローグ

西暦2366年、ELSとの対話を終え人類との共存から2年が経過していた。

今ではすべての人類が『イノベーター』となっており、そして『ELS』と共生した

『ハイブリッドイノベーター』が少しずつ増えていつている。

そんな中ソレスタルビーイングのガンダムマイスター、刹那・F・セイエイはヴェーダ

から正体不明のエネルギー反応が観測されたとの情報が入り『ELSクアンタ』を駆りそのポイントまで向かった。

刹那「反応があったのはこのあたりのはずだが？」

だがそこには何も無く宇宙空間が広がっているだけである。

刹那「どういうことだ・・・？」

不思議に思いつつ地球に帰還しようと向かった瞬間、突然刹那の周りの空間が光だした。

刹那「なんだこの光は！？量子ワープとは違う！くっ、コントロールが効かない！！」

刹那はそのまま光に飲まれていった。

第1話 飛ばされた先で・・・

刹那「うつ・・・。ここは・・・?」

目を覚ますと、刹那は森の中にいた。

刹那「何故俺は森の中に?宇宙にいたはずでは?」

考えていると刹那はあることに気付く。

刹那「つ!?そうだ!クアンタはどこに!?!」

???「ここです、マスター。」

刹那「誰だ!?!」

そう思いいつの間にか装備されていたブレスレットに目をやると。

???「私です、ELSクアンタです。」

刹那「クアンタ・・・なのか?」

クアンタ「はい、茫然としているところ申し訳ないのですが、現在の状況を説明します。」

刹那「つ、頼む。」

クアンタの言葉で刹那の表情が戻る。どうしてクアンタがこのようなブレスレットに変わったのか疑問に思ったが、今は聞かず自分の

身の回りで何が起きているのかを確かめるのが先決だと思った。

クアンタ「マスターは光に飲み込まれたのを覚えていますか？」

刹那「ああ。」

クアンタ「マスターが起きるまでの間、光に飲み込まれていてから
のこととこの世界について調べていました。」

刹那「何かわかったことは？」

クアンタ「はい、率直に申し上げますと今ここにいる世界は私たちが
暮らしていた世界とは別の世界、つまり異世界であり多元世界の
ようです。」

刹那「なっ!?!？」

クアンタ「もちろん地球という世界も存在しているのですが、私た
ちの知っている地球とは全く違います。俗に言う並行世界というも
のですね。」

刹那「……。」

言葉を失う刹那。量子ワープでE.L.Sの星に行ったことはあるが、
それとは全く別のことが今自分の身に起こっている。

刹那「他に分かったことはあるか？」

クアンタ「はい、私たちが今いるこの世界は『ミッドチルダ』と言
い魔法という技術が

発達しています。」

刹那「魔法・・・？」

クアンタ「はい、しかし子供の絵本に出てくるような魔法とは根本的に違うようです。大まかに説明すると、魔法を使う人間のことを『魔導師』と言い魔力を持つ人間には『リンカーコア』というものが存在し、『デバイス』という機械を駆使して魔法を使うようです。」

刹那「ずいぶんと機械じみた魔法だな。」

クアンタ「私もそう思います。」

刹那「話が逸れたな。それで？」

クアンタ「いえ、今のところ分かっているのはそれぐらいだけです。」

刹那「そうか、なら次はおまえのことを教えてくれ。」

クアンタ「わかりました。と言っても私も詳しいことは分からないのですが・・・。」

刹那「どういうことだ？」

クアンタ「この世界に来た際にいつの間にかこの姿に変わっていたんです。ちなみに今の私はデバイスの待機状態になっているようです。」

刹那「そうか……。」

ますます謎が深まっていくばかりである。とりあえず今後のことを考えていたら突然クアンタが何かの反応を捉えた。

クアンタ「マスター！正体不明の機影が30機ほどこちらに接近中です！！」

刹那「何！？」

クアンタ「私たちで対処しましょう！」

刹那「しかし、リンカーコアというものが俺にはあるのか？」

クアンタ「はい、この世界に来てからマスターにリンカーコアの存在を感知しています。」

そうこう話をしてる間に先ほどの機影が到着したようで、いきなり刹那たちにむけて攻撃を放ってきた。

刹那「くっ！」

なんとかよける刹那。

クアンタ「マスター！大丈夫ですか！？」

刹那「ああ、だがクアンタ、さっきお前は『私たち』で対処するといったな？どうすればいい？」

クアンタ「簡単ですマスター！私の名前を言った後に『セットアップ』と言つのです。」

刹那「了解した。」

そして手のひらを開けたまま右腕を前にかざす。

刹那「クアンタ、セットアップ！」

革新者の新たな戦いが始まる・・・。

第1話 飛ばされた先で・・・（後書き）

どうも、おなか痛いです。

刹那の口調こんな感じであってますかね？

つーか、敵30機って多かったかな・・・。

誤字・脱字等がありましたら指摘のほどよろしくお願いします。

第2話 異世界での初戦闘（前書き）

戦闘描写ちゃんと書けてるか限りなく不安です・・・。

第2話 異世界での初戦闘

刹那「クアンタ、セットアップ！」

刹那の周りからGN粒子が溢れだし包み込む。そして、包んだ粒子が消え刹那の体が機械的なアーマーのようなものに覆われていた。

刹那「これは・・・？」

自分の体を見回してみる。そこで刹那は気付いた。

刹那「ダブルオーライザーなのか？」

そう呟くとクアンタが反応する。

クアンタ「はいマスター、これがこの世界での力です。魔導師はデバイスを使い、『バリアジャケット』というものを自身の体に展開して戦います。そして申し訳ありません、ダブルオークアンタは現在調整中なのでダブルオーライザーの方をお使いください。」

クアンタは申し訳なさそうな声で刹那に謝罪をする。それに対して刹那は・・・

刹那「いや充分だ、問題ない。お前はよくやってくれている、ありがとう。(ニコッ)」

クアンタ「いついえそんな・・・。///」

普段見せない刹那の顔に赤く？なるクアンタ。

刹那「このまま敵を迎撃するぞ。」

クアンタ「了解ですマスター！」

刹那「ダブルオーライザー、刹那・F・セイエイ、目標を駆逐する！」

私は高町なのは、機動六課でスターズ分隊の隊長を務めています。私は今部隊長である八神はやて二佐からガジェットが出現したと報告を受け、親友であるフェイトちゃんと一緒に現場に向かっています。

なのは「最近、ガジェットの出現率が多いね。」

フェイト「でも、そのために私たちがいるから。」

なのは「うん、そうだね。そういえばさっき一瞬だったけどガジェットとは別の魔力反応がなかった？」

フェイト「えっ！？どうだったかな？私は気付かなかったけど……。」

フェイトちゃんは気付かなかったらしい、やっぱり私の勘違いだったのかなぁ……。そう思っていたら現場付近の前方の森の中から緑色の光が溢れてきた。

なのは「!?!？」

フェイト「これは!?!？」

私たちはとても驚いた。でもそれも最初だけで……。

なのは「綺麗……。」

フェイト「うん……。」

私たちはその光におもわず見惚れてしまい、こんなに綺麗なものがあるのだろうか？そう思わせるぐらい鮮やかで淡い光を放っていた。そして、光が収まると同時にとてつもない魔力反応を感じた。

なのは「なに、この魔力反応!？」

フェイト「早く現場に向かおう！」

なのは「うんっ！」

フェイトちゃんにそう言われて私たちは急いで現場に向かった。

~~~~~side end~~~~~

刹那「喰らえ！」

両腰にあるGNソード?を抜きライフルモードに切り替えアンノウンに対して、GNビームライフルを放つ。しかしそれはアンノウンの前で霧散する。

刹那「何!？」

GNビームライフルが効かないことに驚く刹那。

クアンタ「マスター私が解析したところやつらはガジェットと呼ばれる機体で、さらにこのガジェットには『アンチマギックファイナルAMF』というものが装備させられています。」

刹那「AMF?」

クアンタ「いいですか、よく聞いてください。この世界でのマスターの攻撃は全て魔力によるものになります。

AMFは魔力による攻撃を防ぐバリアのようなものです。」

刹那「なら俺の攻撃はやつらには効かないということか?」

クアンタ「ご安心ください。AMFにも限界があるらしくあまりに強い攻撃は防ぎきれないようです。ここは接近戦が有効かと。」

刹那「了解した。」

クアンタの説明を聞いて刹那はソードモードに変えて、目の前のガジェットに斬りかかる。

刹那「ここは俺の距離だ!!」

向こうもかかってくるがどんどん切り崩されていく。死角から向かってくるもすぐに反応して

刹那「遅い!」

相手の攻撃を受け流しながらクロスに相手を斬る。

刹那「クアンタ、GNソード?は使えないのか?」

クアンタ「もちろん使えます。」

刹那「用意してくれ」

クアンタ「了解ですマスター。」

GNソード？を腰にしまうとクアンタが。

クアンタ「GNソード？set up。」

急に電子音声つぼくなったことに内心少し驚いたが、すぐに考えるのをやめると右手にさきほどのGNソード？よりも大きいGNソード？が展開された。

刹那「よしっ、これなら。」

そう呟き、再びガジェットに向かっていき5体ほどをまとめてなぎ払う。いつの間にか残るガジェットも1体になっていた。

刹那「残るは機体はあいつのみだ！」

クアンタ「いきましようマスター！」

そう言いながら残る1体に向かっていく刹那とクアンタ。

刹那（この世界でも戦いが起こっている、何故この世界に飛ばされたかは分からないが戦いを生み出すものがある以上俺は戦う。）

クアンタ（この世界に飛ばされた理由はまだ分からないけど、マスターと一緒にどこへだって！）

刹那「そつだ、これが！」

刹那&クアンタ「俺（私）たちの、ガンダムだ（です）！！！」

最後のガジェットは、横に一刀両断され爆発した。

この先、何が起ころうとしているのか……。

## 第2話 異世界での初戦闘（後書き）

どうもです。

戦闘描写ちゃんと書けていたでしょうか？

まあそっちの心配もあるんですがなのはとフェイトの喋り方だいじょうぶかな？

ぶっちゃけ言っちゃうとなのはの原作見てないんだよね。1つも・・・。

なのはの知識はこのサイトで培ったものだからなあ。

まっなんとかなると思いがンバロ

読者の方もテキストに読んでください。

誤字・脱字等あつたら指摘のほどよろしく願います。

## 主人公&デバイス設定(前書き)

やっぱり主人公は強くないとな

## 主人公&デバイス設定

刹那・F・セイエイ

ガンダム00の主人公であり、この物語の主人公である。

年齢：飛ばされた際に75歳から21歳に若返っている。

容姿：2nd seasonの頃の顔

魔力値ランク：SSSランク

趣味：筋トレ

ELSと融合しているせいか身体能力は常人のそれを軽く上回っており、イノベーターとしての能力も健在である。若返っているが、別段精神年齢が若くなっただけというわけでもない。物語が進むにつれてヒロインたちから好意を受けるが、生まれてから『人を好き』になっただけでないのでどう対処していいかわからないため、前の世界の女性仲間と同じように接してしまう。つまり、『鈍感』・・・なのかな？

専用デバイス 『クアンタ』

種類：インテリジェントデバイス

人格：礼儀正しい女性

待機時：青と緑が混ざった（GNソード？）のような色のブレスレット

使用時（バリアジャケット装備時）：今のところダブルオーライザーの装甲と武器を使用者に纏わせる感じ

こちらの世界に飛ばされた際に刹那の搭乗していたELSクアンタがデバイスに変化したもの。完全な自我を持っており、音声はもろん様々な機能を搭載している。刹那のことを心から信頼しており、どんなことがあっても刹那の味方であると決めている。

## 主人公&デバイス設定（後書き）

こんなもんでどうでしょう？

### 第3話 邂逅（前書き）

いよいよ、なのはたちとの邂逅。

P・S 刹那は作者の中でトップ3に入るくらいのかっこよいです。

### 第3話 邂逅

「なのはside」

私たちが現場に到着したときには既に戦闘が終わっていて、爆発した後の煙のせいでよく見えなかったがそこには男性であろう人が立っていて、見たこともないバリアジャケットを装備していた。

フェイト「あの人をやったのかな？」

なのは「多分そうだと思う。」

煙が晴れると、切り崩された大量のガジェットの残骸が転がっていた。

フェイト「これ、ガジェット!？」

なのは「すごい!全て1人で倒したの!？」

私でも1人でこの数を相手にすることはできない。なのにそこにいる人は1人で倒したなんて、『強い』それしか頭に出てこなかった。

フェイト「とりあえず話を聞いてみよう。」

なのは「そうだね。」

とりあえず男性のそばへと近づき。

なのは「あの、少しよろしいでしょうか?」

男性が気付いてこちらを向いたとき、私は思わず……。

なのは「っ!?!?／／／」

顔が赤くなつてしまいました。だってすごかつこよかつたんだもん／／／

＼なのはside end＼

＼刹那side＼

クアンタ「敵ガジェット的全滅を確認しました。」

クアンタが俺にそう教えてくれる。

刹那「そうか、だがこの後どう動くべきか。」

クアンタ「そうですね、こういう存在がいるとわかった以上うかつに行動できませんね。」

俺たちは次にどう行動すべきかを考えていた。するとクアンタが。

クアンタ「マスター、再び周辺に魔力反応あり先ほどとは比べ物になりません。」

刹那「敵か?」

クアンタ「まだ分かりませんが、ただ・・・この反応は人ですね。」

人？ちょうどいい、敵か味方かはわからないが話を聞くことぐらいはできるだろう。そう考えていると・・・。

????「あの、少しよろしいでしょうか？」

後ろから女性の声らしきものが聞こえてきて、俺に話しかけているのか？そう思い後ろを向いた。

????「っ！？／／／」

女性が2人いて片方は顔を真っ赤にした。どうしたのだろうか？

刹那「お前たちは何者だ？」

俺は最も疑問にしていたことを2人に述べる。すると茶髪の女性は慌てながら

????「あっはい、私たちは時空管理局のものです。」

時空管理局？なんだそれは？そう考えていると、クアンタの声が頭の中に響く。

クアンタ『マスター、聞こえますか？』

これは、脳量子波？

クアンタ『いえ、似ていますがこの世界では『念話』といい魔法の一種です。』

俺の考えていることが分かるのか、クアンタはそう答える。脳量子波に近いものならそう難しいことではないだろう。

刹那『それでクアンタ時空管理局とはいったいなんだ？』

クアンタ『簡単に言ってしまうえば私たちの世界でもあった軍のようなものです。』

刹那『軍か……。』

俺は頭の中でそう呟きクアンタとの念話に集中していると。

????『あの〜。聞こえていますか？』

俺に聞こえていないと思ったのか、痺れを切らしたのか茶髪の彼女は心配そうな目で俺を見てくる。

刹那『つすまない、考え事をしていた。それでその時空管理局が俺に何の用だ？』

そう言うと、もう1人の金髪が

????『はい、このガジェットはあなたが倒したんですよね？詳しく話を聞きたいので機動六課に御同行をお願いできますか？』

刹那『分かった。』

そういい、俺はバリアジャケットをしまう。

「????」ありがとうございます。あっ自己紹介が遅れました、時空管理局機動六課所属スターズ分隊の隊長を務めている高町なのはいいます。」

「????」同じく機動六課所属ライトニング分隊の隊長を務めているフェイト・T・ハラOWNといます。」

2人は笑顔で俺に自己紹介をしてくる。こんな女の子たちが隊長を務めているとは……。

なのは「あなたも名前教えてくれないかな?」

刹那「刹那・F・セイエイだ、よろしく頼む2人とも(ニコッ)」

な・フ「?!?/!/」

また赤くなっている、今度はハラOWNまで。

刹那「どうした?」

なのは「なっなんでもないです。/!/」

高町がそう言うとハラOWNもそうなのか首を縦に振る。

クアンタ(マスターもけっこう鈍感ですね……。)

自己紹介を終えた俺はヘリで2人が所属しているという機動六課へと一緒に向かった。

刹那 side end

3人は機動六課に到着して2人は刹那を部隊長室まで案内し、中にはショートヘアの女性が1人椅子に座っておりその肩に手のひらサイズの女の子が座って待っていた。

なのは「高町なのは、フェイト・T・ハラウンただいま任務を終え帰還しました。」

2人はその女性に対して敬礼をした。

「???」うん、おつかれさん。口調も戻してええよ、おかえり。」

なのは「ただいま、はやてちゃん。」

はやて「それで、その人が報告にあつた？」

刹那「刹那・F・セイエイだ。」

はやて「私は時空管理局機動六課部隊長八神はやてとっています。」

リン「私はリンフォースツウアイといひますう。」

軽く自己紹介を終え、さつそく本題にはいった。

はやて「それで、さつそく詳しい説明を聞きたいんですけど、何故あの森に？」

刹那「わからない、元いた場所から急に光に包まれて目を覚ますとあの森の中にいた。だがこいつのおかげでこの世界のことは大体把握した。」

そう言うと刹那は右腕につけてるブレスレットをみる。すると

クアンタ「はじめまして、私はマスターのデバイスのクアンタと申します。どうぞお見知りおきを。」

な・フ・は・リ「「「「喋った!!!?」「」「」

刹那「そんなに珍しいことなのか？」

フエイト「こんな高性能なデバイスはそうそうないと思うよ……。」

はやて「セイエイさんは何処でこのデバイスを？」

刹那「それは「マスター」ここは私が……頼む。」

クアンタが刹那の言葉を遮る。刹那も自分が説明するよりもクアンタが説明した方がいいと思ったのか素直に譲る。

クアンタ「では話を始めます。」

そして説明を始める。自分達の世界のこと、そして突然この世界に飛ばされたこと、MSのクアンタがデバイスに変わっていたなど様々なことを話していく。それを3人は驚きの表情で聞いていた。

はやて「なんや突拍子もない話やな、異世界人なんて。」

なのは「話を聞く限り刹那さんは『次元漂流者』ってことになりま  
すね。」

刹那「次元漂流者？」

フエイト「はい、次元間に置ける事故等が原因で他の次元へと偶然漂流してしまった人のこと、つまり迷子のようなものです。」

刹那「……元の世界に帰還する方法はないかクアンタ？」

クアンタ「今のところは……申し訳ありません。」

刹那「いや気にするな、だが今後どのように行動すべきか……。」「  
はやて「そのことなんやけど、つまり刹那さんは行くあてがないと  
いうことなんですよね？」

刹那「そうなるな。」「

はやて「なら、機動六課で民間協力者として協力してくれませんか  
？」

刹那「いいのか、得体の知れない俺を置いても？」

はやて「はい セイエイさん悪い人には見えないし、それに後ろの  
2人もうれしそうですしね」

フェイト「はっはやて!!!」

なのは「ううう。／＼／」

刹那「よくわからないがこちらとしてはうれしい限りだ、よろしく  
頼む八神はやて。」「

はやて「気軽に名前で呼んでくれてもかまいませんよ?」

はやてがそういうと後ろの2人も。

なのは「私たちも名前で呼んでくれるとうれしいです」

フェイト「うん、これからは一緒に働く仲間ですから。」「

刹那「そうか、なら俺に対しても名前で呼んでくれ敬語も必要ない、慣れていないからな。」

はやて「じゃあ改めてよろしくな刹那くん、クアンタちゃん」

なのは「なにか分からないことあったら何でも聞いてね刹那くん！クアンタちゃん！」

フェイト「これからよろしくね刹那、クアンタ。」

ライン「よろしくですう！」

クアンタ「こちらこそよろしくお願いします。」

刹那「ああ、よろしく頼む4人とも（ニコッ）」

な・フ・は・ク「ククク！？／／／」「」「」

刹那の笑顔を見て赤面する4人。

刹那「どうした、顔が赤いようだが？」

な・フ・は「クククなんでもない（よ！！）」「」「」

クアンタ（マスター本当に鈍感ですね・・・、まあ仕方のないことなのですが。でもやっぱり私もマスターのことが好きなんだなあ。／／／）

刹那「?????」

何が何だかわかっていない刹那であった。

はやて「そっそうやリン、刹那くん機動六課の中を案内を頼むわ！」

リン「はい、分かりましたはやてちゃん！では行きましょう刹那さん！」

刹那「ああ、頼む。」

そついい刹那たちは部隊長室を後にする。

「刹那が出て行ったあとの部隊長室」

なのは「はあ」

刹那が出て行ったあとと思いつき溜息を吐くなのは。それに対してフェイトとはやては。

フェイト「刹那、すごくかっこよかったね。」

はやて「せやな、機動六課いやミッドチルダにもあんなにかっこいい男性はそつそついないと思うぞ。」

なのは「刹那くんの笑った顔、すごくよかったな……。」

そう呟くと、はやてが腹黒い笑顔でなのはに言ってくる。

はやて「なのはちゃん、刹那くんに惚れてもつたんちゃう?」

なのは「ふええ!?!?!」

そう言われるとなのはは顔を真っ赤にする。それに対してはやては腹黒い笑みをし続けている。だが負けじとなのはも。

なのは「そっそっというはやてちゃんはどのかな!?!」

はやて「えっ!?!?!」

思わぬ反撃に同じく顔を真っ赤にするはやて。これにははやても予想してなかった。

はやて「それは、笑った顔はかつこいいと思うけど……。/ /  
/ フェイトちゃんはどのなん!?!」

フェイト「わっわたし!?!」

話を振られるとは思ってなかったのかいきなりで驚きを隠せないフェイト。

フェイト「私もまだほんの少ししか話してないからよく分からないけど一緒にいると安心できるっていうかなんというか……。/ /  
/ (ブツブツ)」

はやて「3人とも惚れてもつたんやな……。」

なのは「にやは……。」

フェイト「うん」

な・フ・は「「「はあ〜」」」

深〜い溜息を吐く3人であった。

### 第3話 邂逅（後書き）

とりあえず、主人公3人にフラグを立ててみました。

ちよつと強引すぎたかな・・・？

はやてとリン口調も合っているかかなり心配だ・・・。

リンあまりセリフなかったけど、公式やら二次小説見て作者の中でリンはガンダムOOでいう八口のな感じのマスコットキャラのポジションなので惚れさせませんでした。リンファンのみなさんすみませんでした。

誤字・脱字がありましたらご指摘のほどよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7227x/>

---

革新者と魔法少女達の出会

2011年10月21日03時00分発行